

## 夏休みを終つて

H N 子

永いと思つた夏休みも愈々終つた。昨日から降り出した雨が今朝もやまぬ。折角の初登園に上天氣なれかしと念じた甲斐もなく、風さへ加はる暴れ模様。

受持の子供の誰彼の顔を一つ／＼思ひ浮べながら、登校の道を急ぐ。四月の入園以來永く附添をはなさなかつたSさん、また捻が戻りはしまいか。氣の弱いT子さんは少しは氣丈になつたかしら。あの丸い／＼顔のKさん、永いお休みに大層肥つたと聞いてゐるが、どんなに丸くなつたらう。はにかみのYさんは、また今日も初めて私の顔を見たら、黙つて私の袖の中に顔をうづめてしまひはせぬだらうか。「ちえんちえい！」としか云へなかつたMさんは、少しは舌がまはる様になつたかしら、大きな體を大きな靴はいて、バタリ／＼とあるくOさんは、あの上大きくなつて、嘸またドタリバタリする事だらう。

それからそれへと考へながら何時しか身は、校門を潜つた。雨は益々ひどく降つてゐる。今日ばかりは雨の音がひどく耳に障つて仕方がない。

今日こそは、一人一人子供を迎へて、我が心の中にシツクリと受入れやうと思つて待ち受ける。室の掃除も整頓も先づ出来た。玄關に出たり、廊下を歩いて見たり、室の中の小さな椅子に腰かけて見たりして。

S子さんが見えた。女學校の大きい姉さんに連れられて。サツサと姉さんの手から離れて私の所へ来た。「先生お早うございます」と。私が顔をのぞき込むと「フフ」と何とも云はれない嬉しそうな顔をして笑ふ。入園當時など笑ふ様な子供になるかとさへ案じられたS子さんが、今日はもう黙つて私の手を握つて嬉しそうに笑ふ様になつた。續いてR子さん、

Y郎さん、S二さん、雨にもまけずに來られた。附添はれる母君やお附きの人々に、一通りの挨拶をするのに一しきりまた忙しい。その間子供達は我勝ちにもどかしそうに、私の手に、袴にすがりついて來る。母親達もニコ／＼、子供達もニコ／＼、先生もニコ／＼、嬉しい氣分が雨に濕つた空氣に搖いでゐる。暑い夏の間を丈夫に育てて、再び幼稚園にと送り出す親の喜び、別れてゐてあゝかかうかと思つてゐた子供達に會ふ先生の喜び、好きな先生と、大勢の遊び仲間と、遊び場所と、遊び道具の備つた所へ來て、躍り出したい程の子供の喜び、室も廊下も玄關も今日は只喜びで充ち／＼てゐる。

□

夜を日に續いても遊びたりない様なH吉さんやY造さんは、もう來るなり直ぐに、庭をひろげ、その上に座つて、積木遊びに餘念がない、「オイ君、隧道するんだよ！僕は今大きな長い汽車をつくるからね！」五六人此處へ集まつて來た。日に焦けた黒い顔、肥つた手足、見るからに丈夫そうである。六十七日のお休みは何處へやら、まるで昨日迄幼稚園に來

てゐたかの様に、その續きでもあるかの様に遊んでゐる。本當に本眞劍な「我」の充實に餘念のないこの時代には、一日は一日で初まつて一日で終る。その瞬間瞬間に生きるものであるから思ひ出ばなしや取越苦勞は不必要であらう。と思つてゐると、此方の方では氣のやさしいY子さんは此の夏海に行つたとて其の話をしてくれた。

「先生、浪の荒い時はね、河へ行つたの、手拭でお魚を取りましたよ。バケツに入れて來るの。鐵の粉があつてね、磁石へつけて遊びましたよ。和田さんの赤ちやんの百日——生れて百ねんねしたんですね——其時に御馳走がありましたよ。」と印象の深かつた事を時の連絡もなくボツリ／＼と話す、頬の鑿を深く作つて。尙も話を續けやうとするとYさんが「S子さん、蟬の抜け殻、ぬけがら！」と呼びに來た。二人は裏庭に面した窓からのぞいて抜け殻を見てゐたが急に聲を揃へて、

「雨コン／＼止んでくれ！あしたの晩に降つて呉れ！」

□

「先生、ト、(此處)」と右の眼を指して來たのはMさん。あどけない眼を一杯に開いて、また、いつもの様に私の膝に乗つてしまふ。

「お眼はどうなさつて?」

「お醫者様へ行つたの」

「そう、眼が悪かつたんですね」

「うん、海にト、(魚)ゐましたよ。おほちな(大きな)ちと(人)ばかり取るの。兄ちゃんも取らないの」。さぞ漁師達の取るのが羨ましかつた事であらう。あの黄銅色の仁王の様な體の漁師が掛け聲勇ましく網曳く様子にデット見とれたMさんは、どんなにかこの人達を偉くも思ひ理想とも考へた事であらう。Mさんは相變らず舌がまはらない。しかし大きくなつたこと!重くなつたこと!

□

組の中で一番早生れのまた一番背の高いI子さんが、今日、I子さんと手を引いて歩いてゐるのを見るとI子さんの方が一寸も背が高くなつてゐる。I子さんの、このお休みの中に大きくなつたのには驚いてしまふ。よく、一枚の着物を同じ年の中に二度

も腰、上げを下ろす事があると聞いてゐたがI子さんなどは、きつと、その仲間であらう。僅か二ヶ月の間でも發育盛りの子供達は本當にメツキリ大きくなる。はにかむ子供も氣の弱い子供も見違へる様にハキ／＼として今日は遊んでゐる。氣を揉むものではない、あせるものではない、時が來れば皆それ／＼に長所を發揮してよい子供になるものであるとしみ／＼思ふ。

□

二時間に充たない第一日の幼稚園生活も子供には長くも思はれまた珍らしくも面白くも感ぜられたであらう。しばらく別れてゐて、何處かに物足らなさを感じてゐた私の心が、今日はギツチリ、隙間なしにつまつた様な氣がする。また明日から忙しい、しかし楽しい日が繰りかへされる。有り餘る元氣で子供はぶつかつて來るに違ひない。私もお休みの中に貯へた餘裕を、力を、充分に出して、子供にまけずに、元氣に遊びたい。子供の心の中深く分け入つて行きたい。

雨の第一日はかうして暮れて行く。(九月十二日記)